水の東西

山崎　正和

「鹿①おどし」が動いているのを見ると、その愛嬌のなかに、なんとなく人生のけ★●だるさのようなものを感じることがある。かわいらしい竹のシーソーの一端に水受けがついていて、それに筧②の水が少しずつたまる。静かに緊張が高まりながら、やがて水受けがいっぱいになると、シーソーはぐらりと傾いて水をこぼす。緊張が一気にとけて水受けが跳ね上がるとき、竹が石をたたいて、こおんと、●くぐもった優しい音をたてるのである。

見ていると、単純な、ゆるやかなリズムが、無限にいつまでも繰り返される。緊張が高まり、それが一気にほどけ、しかし何事も起こらない徒労がまた一から始められる。ただ、曇った音響が時●を刻んで、庭の静寂と時間の長さをいや●がうえにも

山崎　正和　一九三四年（昭和九）―。劇作家、評論家。京都府生まれ。主な著書―評論『鷗外　闘う家長』、戯曲「世阿弥」など。本文は、『混沌からの表現』（一九七七）によった。

①**鹿おどし**　本文及び写真参照。本来は鹿や猪などを追い出すためのものだったが、のちに専ら風流を楽しむものとなった。

★どのような点に「人生のけだるさのようなものを感じる」のか。

引き立てるだけである。水の流れなのか、時の流れなのか、「鹿おどし」は我々に流れるものを感じさせる。それをせき止め、刻むことによって、この仕掛けはかえって流れてやまないものの存在を強調していると言える。

私はこの「鹿おどし」を、ニューヨークの大きな銀行の待合室で見たことがある。日本の古い文化がいろいろと紹介されるなかで、あの素朴な竹の響きが西洋人の心をひきつけたのかもしれない。だが、ニューヨークの銀行では人々はあまりに忙しすぎて、一つの音と次の音との長い間隔を聞くゆとりはなさそうであった。それよりも窓の外に噴き上げる華や

鹿おどし

②**筧**　水を引いてくるためにかけ渡したとい。「とい」とは、竹や木を用いて作った、水を通す溝や管のこと。

◉けだるさ
くぐもった
時を刻む
いやがうえにも
◎徒労　素朴
間隔

かな噴水のほうが、ここでは水の芸術として明らかに人々の気持ちをくつろがせていた。

流れる水と、噴き上げる水。

そういえばヨーロッパでもアメリカでも、町の広場にはいたるところにみごとな噴水があった。ちょっと名のある庭園に行けば、噴水はさまざまな趣向を凝らして風景の中心になっている。有名なローマ郊外のエステ家[3]の別荘など、何百という噴水の群れが庭をぎっしりと埋め尽くしていた。樹木も草花もここでは添えものにすぎず、壮大な水★の造型がとどろきながら林立しているのに私は息をのんだ。それは揺れ動くバロック[4]彫刻さながらであり、ほとばしるというよりは、音をたてて空間に静止しているように見えた。

時間的な水と、空間的な水。

そういうことをふと考えさせるほど、日本の伝統のなかに噴水というものは少ない。せせらぎを作り、滝をかけ、池を掘って水を見ることはあれほど好んだ日本人が、噴水の美だけは近代に至るまで忘れていた。伝統は恐ろしいもので現代の都会でも、日本の噴水はやはり西洋のものほど美しくない。そのせいか東京でも大阪で

③**エステ家**　イタリアの貴族。一六世紀に、ローマ郊外のティボリに壮大な別荘を造営した。

★噴水を「水の造型」と表現したのはなぜか。

④**バロック**　一六世紀末から一八世紀初めにかけてヨーロッパで流行した芸術の様式。動的・感覚的な表現を特色とする。

◉名のある
趣向を凝らす
添えもの
林立する
息をのむ
さながら

◎噴水　別荘
壮大　造型

エステ家の噴水（上：ネプチューンの噴水、下：ヴィーナスの噴水）

日本の庭園（京都市・妙満寺）

も、町の広場はどことなく間が抜けて、表情に乏しいのである。

西洋の空気は乾いていて、人々が噴き上げる水を求めたということもあるだろう。⑤ローマ以来の水道の技術が、噴水を発達させるのに有利であったということも考えられる。だが、人工的な滝を作った日本人が、噴水を作らなかった理由は、そういう外面的な事情ばかりではなかったように思われる。日本人にとって水は自然に流れる姿が美しいのであり、圧縮したりねじ曲げたり、粘土のように造型する対象ではなかったのであろう。

いうまでもなく、水にはそれ自体と

⑤**ローマ**　古代ローマ帝国のこと。現在のイタリアの首都ローマを中心に地中海沿岸全域を支配し、その文化は紀元一、二世紀に最高潮に達した。

して定まった形はない。そうして、形がないということについて、おそらく日本人は西洋人と違った独特の好みを持っていたのである。「行雲流水」[6]という仏教的な言葉があるが、そういう思想はむしろ思想以前の感性によって裏づけられていた。★それは外界に対する受動的な態度というよりは、積極的に、形なきものを恐れない心の現れではなかっただろうか。

見えない水と、目に見える水。

もし、流れを感じることだけが大切なのだとしたら、我々は水を実感するのに、◉もはや水を見る必要さえないと言える。ただ断続する音の響きを聞いて、その間隙（かんげき）に流れるものを間接に心で味わえばよい。そう考えればあの「鹿おどし」は、日本人が水を鑑賞する行為の極致を表す仕掛けだと言えるかもしれない。

⑥**行雲流水**　空を行く雲や流れる水のように、自然のままに行動すること。

★「それ」とは、何をさすか。

◉表情に乏しい
もはや

◎圧縮　断続
鑑賞　極致

学習のポイント

1 次の対比的表現は、「鹿おどし」と「噴水」のどのような点をとらえたものか。それぞれについてまとめてみよう。

①「流れる水と、噴き上げる水。」（一九六ページ3行）

②「時間的な水と、空間的な水。」（一九六ページ11行）

③「見えない水と、目に見える水。」（一九九ページ6行）

2「『鹿おどし』は……言えるかもしれない。」（一九九ページ9～10行）とあるが、その理由をまとめてみよう。

3 この文章の論の進め方にはどのような特色があるか、まとめてみよう。

4 この文章を読んで、新たに発見したことや印象に残った表現などを発表してみよう。

5 次の語句を使って短文を作ってみよう。

① いやがうえにも（一九四ページ10行）

② さながら（一九六ページ9行）

③ もはや（一九九ページ8行）

漢字レベルアップ

1 次の傍線部の読みを平仮名で書いてみよう。

① 曇天が続く。

② 机を隔てて座る。

③ 依頼をきっぱりと断る。

④ 趣のある景色。

⑤ 荘厳に行われる儀式。

2 次の片仮名を漢字で書いてみよう。

① 道路をカクチョウする。

② トホで駅に向かう。

③ 情勢がキンパクしてきた。

④ 植物ズカンで調べる。

⑤ 工場をユウチする。